

大学生の能力観と家庭背景

河野 志穂

キーワード：大学生、能力、家庭環境、ペアレントクラシー

【要旨】本研究の目的は、大学生の自身の能力に対する自己評価（以下、「能力観」と適宜略記）に対して、父母の学歴、父母の職業、家計年収、家族の養育方針といった家庭背景がいかなる関連を持っているかを考察することである。2010年1月から4月にかけて、3大学の大学3年生（4月に調査実施の場合は新4年生）を対象に行った進路意識調査をもとに、能力観と家庭背景の関係性を基礎的な統計手法で考察する。分析の結果、学生の能力観と同性の親の学歴に何らかの関係性があること、男女ともに「論理的な文章を書く力」に関して、父親学歴が高い方が高く自己評価をしていること、親の職業との関連では「情報を収集し活用する力」において、男子学生の場合は専門・管理職に就く母親を持つ男子学生の方が自己評価が高いものの、女子学生の場合は専業主婦等をしている母親を持つ女子学生の方が自己評価が高いこと等がわかった。

1. はじめに

本研究の目的は、大学生の自身の能力に対する自己評価（以下、「能力観」と適宜略記）に対して、父母の学歴、父母の職業、家計年収、家族の養育方針といった家庭背景がいかなる関連を持っているかを考察することである。

能力に関しては、2000年代に入り、政府機関が若者の能力に関して様々な提言を行っている。例えば、2003年の内閣府人間力戦略研究会による「人間力」、2004年の厚生労働省による「若年者就職基礎能力」、2006年の経済産業省による「社会人基礎力」、2008年の文部科学省中央教育審議会による「学士力」である。これらの提言の目的はそれぞれ異なるものの、これらの能力を構成しているのは基礎学力や創造性といった「知識」にかかわる能力、協調性やネットワーク形成といった「他者」とかかわる能力、能動性や自発性といった「自己」とかかわる能力である点は共通している¹⁾。

これまで、学校や大学など教育機関で育成することが目指される能力について議論される時、その中心は「学力」や「学歴」であったことを考えれば、こうした動向は、子どもや若者の能力を測る観点の多様化を示していると言えよう。

産業社会で求められる能力とポスト産業社会で求められる能力を対比的に整理した本田(2005)によれば、ポスト産業社会では「基礎学力」や知識量・知的操作の速さ、順応性といった近代型能力ではなく、「生きる力」や意欲、個性、交渉力といったポスト近代型能力が求められるようになるという²⁾。そして、ポスト近代型能力は、近代型能力に比べ、「個々人の生来の資質か、あるいは成長する過程における日常的・持続的な環境要件によって決まる部分が多い(本田：2005：前掲書：24)」という。つまり、ポスト近代型能力の形成には、日常的に子どもと向き合う家庭環境の影響が大きいのである。

教育社会学の領域では、これまで学歴を通じた階層移動など、親と子の学歴や職業の関係性に着目した研究が多数行われているものの、より微細な、能力に着目した研究は萌芽的段階といえる。本論文では、大学3年生を対象に行った進路意識調査をもとに、大学生の能力観と家庭背景の関係性を考察する。

2. 調査概要および使用する変数について

2-1. 調査概要

本論文は、2010年1月から2010年4月にかけて行った大学生調査で得られたデータを利用して、調査の目的は、大学生の進路決定のプロセスを解明することであり、調査の対象として、民間企業のセミナーへの参加等、学生にとって進路選択が現実的な問題となってくる大学3年生を対象とした。

また調査対象の大学は、教員養成課程ではない（つまり開放制をとっている）4年制私立大学の教育関係学部とした。これは、こうした学部では、卒業後の進路が多様であると同時に、教員免許取得者が一定数いるためである。大学生の卒業後の進路は、民間企業、公務員、大学院など多様であるが、教員の場合、在学中に免許を取得しようとする者は入学当初から計画的に科目を履修する必要がある。つまり、教員志望者の場合、その他の進路志望者に比べて、進路を早く決定せざるを得ない状況にある。そして、教育関係学部の中でも開放制をとっている大学では、免許取得に必要な科目を履修するか否かは学生本人の判断に委ねられている。

調査の方法は質問紙調査である。実施大学の属性、質問紙の配布数、回収数、配布方法は表1のとおりである。なお、本論文で考察するのは能力観であるため、学力面での各大学の社会的評価を補足しておく必要があろう。代々木ゼミナールが公表する2012年の入学難易度はA大学で40台半ば、B大学で60台半ば、C大学で50台後半となっている。

表1 調査対象校の属性、質問紙の配布数・回収数・回収率・配布方法

	大学の属性	配布数	回収数	回収率	配布方法
A大学	関西圏 ・共学	444	248	55.9%	3年生の必修授業で配布し回収。 回答は任意。
B大学	首都圏 ・共学	931	151	18.2%	3年生の必修授業やゼミで配布。 回答は任意。
C大学	首都圏 ・女子大学	500	42	8.4%	4年生のオリエンテーションで配布。 回答は任意。
合計	—	1,775	441	24.2%	—

2-2. 使用する変数

先行する調査等をもとに、質問紙には以下の変数を盛り込んだ。

- ①能力観（自信の能力に対する自己評価）
- ②父母の最終学歴
- ③父母の職業、従業上の地位

④家庭の年収

⑤親の教育方針

それぞれの変数について簡単に説明する。まず、①能力観とは、自身が保有する能力を周囲の大学生と比較した場合の自己評価である。能力観として、先述の能力の多様化の動向を鑑み、「知識」「他者」「自己」に関わる能力を把握すべく16の設問を設定した。回答方法は「劣っていると思う—やや劣っていると思う—同程度だと思う—やや秀でていると思う—秀でていると思う」の5段階尺度で問うた。能力に対する自信ではなく、他者と比べた自己評価を聞いたのは、主観的になりがちな自己評価という手法において、多少なりとも相対的な視点を導入できるのではないかと考えたためである。

次に、②父母の最終学歴、③父母の職業、従業上の地位、④家庭の年収である。これらは家庭の社会階層を示す指標であり、親子間の社会的地位の継承を考察する上で必須の項目である。②や③に関しては、学校基本調査等、各種統計を参考に区分を定めた。④家庭の年収は250万円から1,500万円までを250万円区切りで区分した。

最後に、⑤親の教育方針に関しては過去と現在、2時点について問うた。まず、過去に関しては、親との接触度合いが一般的に高いと思われる中学生の頃までに、親が自分にどのように接していたか、また、家族でどのような事柄を経験したかを、現時点から回顧する形で尋ねた。また、現在に関しては、自分の卒業後の進路に対して親がどのような態度や行動をとっているかを尋ねている。

分析にあたっては、予備的な分析を行った際、従属変数となる①能力観に関して、学校の違いよりも性別の違いによってかなり自己評価が異なることが明らかになったため、性別を統制変数として用いることとした（性別ごとの能力観の分布については3-1で述べる）。以下の分析では、①から⑤の変数に関して基礎的な分布を確認したのち、主にクロス表を用いて、①能力観と各種の変数（②～⑤）の関係を考察する。

3. 基礎集計

3-1. 能力観

表2は、学生の自身の能力に対する自己評価を男女別に示したものである。表中では、性別ごとに最も回答者が多かった選択肢に網掛けを施した。網掛けで明らかなように、「(M) 新しいことに挑戦する積極性」を除いたすべての項目において、最も回答者の割合が高い選択肢は、男子学生、女子学生ともに同一である。ちなみに選択肢としては「周囲の学生と同程度だと思う」が選ばれることが多く、16項目中12項目において、男女ともに「周囲の学生と同程度だと思う」を選んだ者が最も多かった。このように、自身の能力に関しては周囲と同レベルと評価する学生が多く、「やや秀でている」が最も回答者の割合の高い選択肢となる項目は少数である（具体的には、「(A) 年上・目上の人とのコミュニケーション能力」「(D) 場の空気を読む力」「(E) 社会的弱者の状況を想像する力」を指す）。また、「やや劣っていると思う」や「劣っていると思う」が最も回答者の割合が高い選択肢となる項目はなかった。

表2の右側では、優位評価、同位評価、劣位評価に関して、男性から女性を引いたポイントを

表2 男女別、学生の自身の能力に対する自己評価（能力観）

項目	性別	劣っている と思う	やや劣って いると思う	同程度だ と思う	やや秀で ていると 思う	秀でてい ると思う	合計 (下段はN)	χ^2	男性 - 女性		
									劣位 評価	同位 評価	優位 評価
(A) 年上・目上の人とのコミュニケーション能力	男性	2.7	7.6	28.7	43.5	17.5	100.0 (223)	n.s.	-5.8	-5.4	11.2
	女性	2.9	13.2	34.1	36.6	13.2	100.0 (205)				
(B) リーダーシップをとる力	男性	5.9	22.1	30.2	28.8	13.1	100.0 (222)	n.s.	-4.8	-4.0	8.7
	女性	7.3	25.4	34.1	26.3	6.8	100.0 (205)				
(C) 周りを楽しませる力	男性	4.5	20.2	35.4	22.0	17.9	100.0 (223)	**	8.6	-1.2	-7.4
	女性	2.4	13.7	36.6	35.6	11.7	100.0 (205)				
(D) 場の空気を読む力	男性	3.1	10.3	33.2	34.1	19.3	100.0 (223)	n.s.	3.2	4.9	-8.1
	女性	2.4	7.8	28.3	40.5	21.0	100.0 (205)				
(E) 社会的弱者の状況を想像する力	男性	4.0	9.0	36.3	36.8	13.9	100.0 (223)	n.s.	2.3	0.2	-2.5
	女性	1.0	9.8	36.1	41.0	12.2	100.0 (205)				
(F) 自分で予定をたててやり遂げる力	男性	7.7	21.6	37.4	20.7	12.6	100.0 (222)	†	5.4	8.6	-14.0
	女性	6.3	17.6	28.8	28.3	19.0	100.0 (205)				
(G) 情報を収集し活用する力	男性	4.1	14.0	39.6	31.5	10.8	100.0 (222)	n.s.	-1.5	3.1	-1.6
	女性	3.9	15.6	36.6	29.3	14.6	100.0 (205)				
(H) 論理的な文章を書く力	男性	11.7	25.2	36.0	19.4	7.7	100.0 (222)	n.s.	0.4	-0.5	0.2
	女性	5.4	31.2	36.6	19.0	7.8	100.0 (205)				
(I) 批判的に文章を読む力	男性	7.2	21.5	35.0	26.9	9.4	100.0 (223)	†	-6.4	-2.6	9.0
	女性	4.4	30.7	37.6	19.0	8.3	100.0 (205)				
(J) 自ら問いをたて答えを導き出す力	男性	4.5	16.3	42.5	28.1	8.6	100.0 (221)	n.s.	-3.6	-3.3	6.9
	女性	5.9	18.5	45.9	22.9	6.8	100.0 (205)				
(K) 自分の考えを表現する力	男性	5.8	16.6	39.0	27.4	11.2	100.0 (223)	n.s.	-2.5	0.5	2.0
	女性	3.4	21.5	38.5	25.9	10.7	100.0 (205)				
(L) 独創的なアイデアを生み出す力	男性	4.0	19.7	36.8	27.8	11.7	100.0 (223)	†	-10.9	1.6	9.2
	女性	8.8	25.9	35.1	19.5	10.7	100.0 (205)				
(M) 新しいことに挑戦する積極性	男性	5.4	13.5	33.2	26.5	21.5	100.0 (223)	n.s.	-4.1	6.4	-2.3
	女性	2.9	20.0	26.8	30.2	20.0	100.0 (205)				
(N) 物事に継続して取り組む力	男性	5.0	11.7	33.8	28.8	20.7	100.0 (222)	n.s.	1.5	1.6	-3.1
	女性	3.9	11.2	32.2	28.8	23.9	100.0 (205)				

項目	性別	劣っていると思う	やや劣っていると思う	同程度だと思ふ	やや秀でていると思ふ	秀でていると思ふ	合計 (下段はN)	χ ²	男性 - 女性		
									劣位評価	同位評価	優位評価
(O) 他者から理不尽な要求をされても冷静に対処する力	男性	7.6	10.8	37.7	31.8	12.1	100.0 (223)	n.s.	-0.6	0.1	0.5
	女性	2.9	16.1	37.6	32.2	11.2	100.0 (205)				
(P) 体力	男性	7.6	13.9	26.9	25.6	26.0	100.0 (223)	***	-6.3	-12.6	18.9
	女性	4.9	22.9	39.5	21.0	11.7	100.0 (205)				

※網掛けの部分は、それぞれの性別で最も回答者の多かった回答。

*** p < .001 ** p < .01 † p < .1

※劣位評価とは「劣っていると思う」「やや劣っていると思う」の合計であり、優位評価とは「やや秀でていると思う」と「秀でていると思う」の合計である。同位評価とは「同程度だと思ふ」と「秀でていると思う」の割合をそのまま記している。
 ※- (マイナス) の場合は男性より女性の評価者の割合が高いことを示している。

示した。なお、優位評価とは「秀でていると思う」と「やや秀でていると思う」を合算したパーセンテージである。同位評価とは「同程度だと思ふ」の数値である。劣位評価とは「やや劣っていると思う」と「劣っていると思う」を合算したパーセンテージである。優位評価に着目すると、女子学生に比べ、男子学生の方が自身の能力は周りの学生よりも秀でていると回答している項目が多く、16項目中9項目で女子のポイントを上回っている。特に、7ポイント以上、女子を上回っているのは、「(P) 体力 (優位評価を選んだ男子は女子よりも18.9ポイント多い)」「(A) 年上・目上の人とのコミュニケーション能力 (11.2ポイント男子高)」「(L) 独創的なアイデアを生み出す力 (9.2ポイント男子高)」「(I) 批判的に文章を読む力 (9.0ポイント男子高)」「(B) リーダーシップをとる力 (8.7ポイント男子高)」である。他方、女子の方が優位評価を選択した人が多い項目は7つあった。7ポイント以上、女子が男子を上回っているのは、「(F) 自分で予定をたててやり遂げる力 (優位評価を選んだ女子は男子よりも14.0ポイント多い)」「(D) 場の空気を読む力 (8.1ポイント女子高)」「(C) 周りを楽しませる力 (7.4ポイント女子高)」である。このように、同じ対人関係に関わる能力であっても、男子学生は、年上・目上の人とのコミュニケーション能力、リーダーシップといった垂直的な人間関係に関する能力の自己評価が高くなる一方で、女子学生は、周りの人を楽しませるといった水平的な人間関係に関する能力の自己評価が高い傾向にある。

また、男女の有意差に着目した場合、0.1%水準で有意であるのは「(P) 体力」、1%水準で有意なのは「(C) 周りを楽しませる力」、10%水準で有意なのは「(F) 自分で予定をたててやり遂げる力」「(I) 批判的に文章を読む力」「(L) 独創的なアイデアを生み出す力」である。これらに関しても、優位評価に注目して男女差を示すと、男子の方が優位評価の選択者が多かったのは「(P) 体力 (18.9ポイント男子高)」「(L) 独創的なアイデアを生み出す力 (9.2ポイント男子高)」「(I) 批判的に文章を読む力 (9.0ポイント男子高)」である。他方、女子の方が優位評価を選択した者が多かったのは「(F) 自分で予定をたててやり遂げる力 (14.0ポイント女子高)」「(D) 場の空気を読む力 (7.4ポイント女子高)」である。

以上のように、学生が下す自身の能力に対する自己評価（能力観）としては、「周りの学生と同程度」と中庸の評価を下す者が多い。しかしながら、年上・目上の人とのコミュニケーション、場の空気を読む、社会的弱者の状況を想像するといった、他者との関係性に関する項目に関しては「やや秀でている」と回答する者が多い。

また、いくつかの項目では男女間で有意な差があり、体力といったフィジカルな能力、独創的なアイデアを生み出す力、批判的文章読解力といった積極性に関わる能力に関しては男子において自己評価が高く、計画性やその遂行力といった定型的業務の遂行に関わる力、周りを楽しませる力といった協調性に関わる能力に関しては女子において自己評価が高いことがわかった。

3-2. 家庭背景

3-2-1. 父母の最終学歴

図1および図2は、父親および母親の学歴を、学生の性別ごとに表したものである。なお、父親学歴、母親学歴ともに、学生の性別の間で、有意差は認められなかった。

まず、父親の学歴に関して述べると（図1参照）、男女ともに大学卒業者が多く、男子学生の父親で48.6%、女子学生の父親で51.0%と約半数を占めている。大卒に次ぐのは高校卒業で、男子学生の父親で34.4%、女子学生の父親で26.5%となっている。

また母親の学歴に関しては（図2参照）、父親学歴に比べ、大学卒業者が少ないものの、その分、短大卒業者が多い。学歴区分ごとにみると、男子学生の母親の27.6%、女子学生の母親の27.9%が大卒者である。高校卒業は、男子学生の母親の36.0%、女子学生の母親の27.4%である。そして、短大卒業は、男子学生の母親の15.4%、女子学生の母親の19.8%が該当する。

以上から、調査対象者の父母の半数以上が、高校卒業以降の教育を受けていることがわかる。その家庭から大学にはじめて通う者となる学生はファーストジェネレーション（第一世代）と呼ばれ、第一世代には大学での学習や進路選択に際して支援が必要と言われている。本調査の標本で

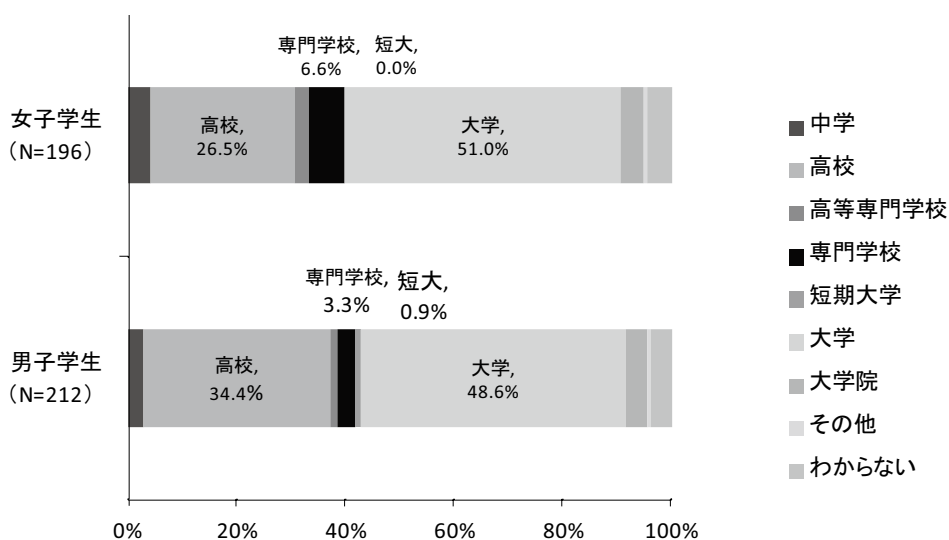


図1 男女別、父親の学歴

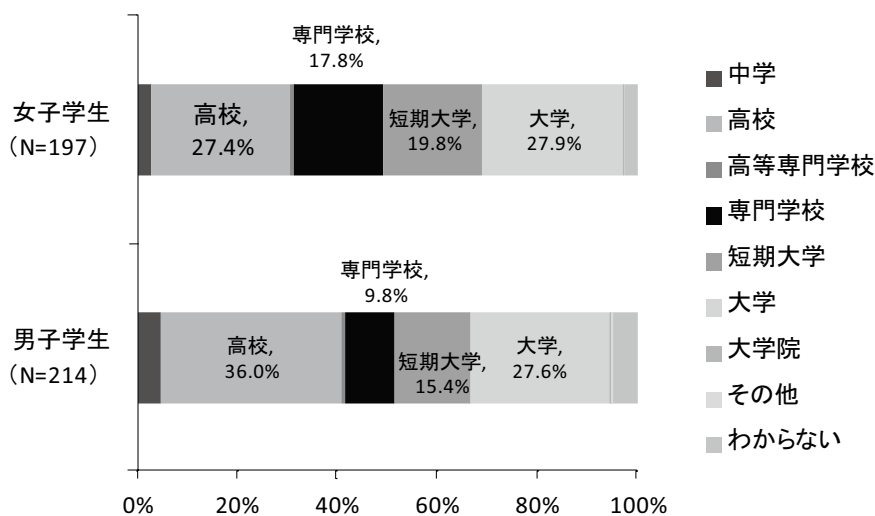


図2 男女別、母親の学歴

は、父母の最終学歴の組み合わせにもよるが、大学教育を受けるファーストジェネレーションの学生は少数派と思われる。

3-2-2. 父母の職業、従業上の地位

表3は父母の職業を、学生の性別ごとに表したものである。

まず、父親の職業については、男女ともに、「専門職・技術職・教職」がもっとも多く、男子学生の父親の25.1%、女子学生の父親の30.8%が該当する。次いで多いのは、男女ともに「事務・営業・販売職」で、男子学生の父親の22.7%、女子学生の父親の19.5%である。なお、女子学生の父親の場合、「製造・建設・運転・労務職」に従事する父親も同率（19.5%）であった。また、母親の職業については、男女ともに「専業主婦」が最も多く、男子学生の母親で36.6%、女子学生の母親では25.3%が該当する。次いで多いのは、男女ともに「専門・技術職・教職」で、男子学生の母親では17.1%、女子学生の母親では24.2%となっている。なお、母親の職業のみで男女間で有意差が認められた。

表3 男女別、父母の職業

	性別	専門職・技術職・教職	管理職	事務・営業・販売職	製造・建設・運転・労務職	サービス職	農林漁業職	専業主婦・主夫	無職	その他	(%) 合計 (下段はN)	χ^2
父親の職種	男性	25.1	16.1	22.7	14.7	10.0	1.4	0.5	1.4	8.1	100.0 (211)	n.s.
	女性	30.8	14.4	19.5	19.5	6.2	2.6	0.0	0.0	7.2	100.0 (195)	
母親の職種	男性	17.1	2.9	14.1	3.4	12.7	1.5	36.6	3.9	7.8	100.0 (205)	†
	女性	24.2	2.5	21.2	7.1	11.1	1.5	25.3	2.5	4.5	100.0 (198)	

† p < .1

表4 男女別、父母の従業上の地位

	性別	一般社員・職員	係長・主任	課長以上の管理職	役員	自営業主	家族従事者	アルバイト・パート	その他	(%) 合計 (下段はN)	χ^2
父親の 従業上の地位	男性	22.3	13.1	35.4	4.4	13.6	1.0	2.4	7.8	100.0 (206)	n.s.
	女性	24.5	14.9	34.0	6.4	12.2	0.0	1.6	6.4	100.0 (188)	
母親の 従業上の地位	男性	24.4	4.4	2.8	4.4	2.8	19.4	36.1	5.6	100.0 (180)	n.s.
	女性	25.0	4.0	3.4	2.8	6.8	15.3	39.2	3.4	100.0 (176)	

次に、表4は父母の従業上の地位を、学生の性別ごとに表したものである。

まず、父親の従業上の地位については、男女ともに「課長以上の管理職」が最も多く男子学生の父親の35.4%、女子学生の父親の34.0%が該当する。次いで多いのは、男女ともに「一般社員・職員」で、男子学生の父親の22.3%、女子学生の父親の24.5%である。また、母親の従業上に地位については、男女ともに「アルバイト・パート」が最も多く、男子学生の母親の36.1%、女子学生の母親の39.2%が該当している。次いで多いのは、男女ともに「一般社員・職員」で、男子学生の母親の24.4%、女子学生の母親の25.0%である。

このように、父母の職業や従業上の地位に関しては、母親の職種を除いて、学生の性別ごとに類似した傾向がみられることがわかる。また、母親の職業としては専業主婦が多く、就業している場合においてもアルバイト・パートが多いことから、家庭内では就業に関して性別役割分業が行われている様子が推察される。

3-2-3. 家庭の年収

表5は、家庭の年収を男女別に表したものである。10%水準ながらも、男女間で有意差が認められた。男女ともに最も多いのは「7. わからない」という回答で、男子学生で27.9%、女子学生で34.3%である。家庭年収の金額を選択した者のうち、男子学生の場合、最も選択者が多かったのは「3. 500万円以上750万円未満くらい」の22.5%であった。他方、女子学生の場合、選択者が多かった選択肢は2つあり「2. 250万円以上500万円未満くらい」と「4. 750万円以上1,000万円未満くらい」でともに14.6%が選択している。

表5 男女別、家庭の年収

	性別	1. 250万円 未満くらい	2. 250万円 以上 500万円未 満くらい	3. 500万円 以上 750万円未 満くらい	4. 750万円 以上 1,000万円 未満くらい	5. 1,000万円 以上 1,500万円 未満くらい	6. 1,500万円 以上	7. わからない	(%) 合計 (下段はN)	χ^2
家庭の年収	男性	5.9	13.1	22.5	14.0	13.5	3.2	27.9	100.0 (222)	†
	女性	7.6	14.6	10.6	14.6	12.6	5.6	34.3	100.0 (198)	

† $p < .1$

「7.わからない」を除いた金額表記のある選択肢（1.～6.）に関して、男女間の差を、t検定を用いて調べた。有意差はなかったものの、男性で3.36、女性で3.41となった。女性の家庭年収の分布は高低二極に分布しているものの、平均値では女性の方が高いと言える。

3-2-4. 親の教育方針

表6は、中学生の頃までに親が自分にどのように接していたか、また、家族でどのような事柄を経験したかを表している。

8つの項目中、「(F) 一人あるいは兄弟のみで食事をした」「(H) 親に叩かれた」を除く6項目で、男女間で有意差があった。有意差のあった項目のうち、最も回答者が多かった選択肢が男女で異なるものをあげると、「(A) 親が勉強をみてくれた（5%水準で有意）」「(B) 親がよく本を読んでくれた（0.1%水準で有意）」「(C) 家族で旅行に行った（5%水準で有意）」「(D) 家族で美術館・博物館に行った（0.1%水準で有意）」「(G) 親の機嫌で叱られた（1%水準で有意）」

表6 男女別、中学生までの親との関係、家族と経験した事柄

項目	性別	全く なかった	あまり なかった	たまに あった	よくあった	(%) 合計 (下段はN)	χ^2
(A) 親が勉強をみてくれた	男性	20.3	34.7	31.1	14.0	100.0 (222)	*
	女性	16.6	24.4	36.6	22.4	100.0 (205)	
(B) 親がよく本を読んでくれた(雑誌・マンガ除く)	男性	22.5	25.7	32.0	19.8	100.0 (222)	***
	女性	12.2	21.0	29.3	37.6	100.0 (205)	
(C) 家族で旅行に行った	男性	7.2	13.6	46.6	32.6	100.0 (221)	*
	女性	4.4	13.2	36.1	46.3	100.0 (205)	
(D) 家族で美術館・博物館・図書館に行った	男性	29.3	31.5	30.6	8.6	100.0 (222)	***
	女性	16.1	30.2	32.2	21.5	100.0 (205)	
(E) 欲しいものを何でも買ってくれた	男性	20.3	40.1	34.2	5.4	100.0 (222)	†
	女性	11.7	40.5	38.5	9.3	100.0 (205)	
(F) 一人あるいは兄弟のみで食事をした	男性	24.9	38.9	24.0	12.2	100.0 (221)	n.s.
	女性	26.8	43.4	21.5	8.3	100.0 (205)	
(G) 親の機嫌で叱られた	男性	29.0	40.7	19.9	10.4	100.0 (221)	**
	女性	20.0	33.7	37.1	9.3	100.0 (205)	
(H) 親に叩かれた	男性	22.5	25.7	34.7	17.1	100.0 (222)	n.s.
	女性	25.4	26.3	38.0	10.2	100.0 (205)	

※網掛けの部分は、それぞれの性別で最も回答者の多かった回答。

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$ † $p < .1$

である。これらの中でも、特に「(A) 親が勉強を見てくれた」「(D) 家族で美術館・博物館・図書館に行った」「(G) 親の機嫌で叱られた」の3項目に関しては、男女で肯定・否定の回答傾向が異なることに注目する必要がある。

次に、表7は、自身の卒業後の進路に関して、現在、親がどのような態度や行動をとっているかを表している。6つの項目のうち4つの項目で、男女間で有意差があった。有意差のあった項目のうち、最も回答者が多かった選択肢が男女で異なるものをあげると、「(C) 希望の進路を前向きに応援してくれる (10%水準で有意)」「(D) 進路選択にかんする親の経験談を話してくれる (10%水準で有意)」「(E) 就職活動に必要な費用を出してくれる (1%水準で有意)」である。こちら、「(D) 進路選択にかんする親の経験談を話してくれる」において、男女で肯定・否定の回答傾向が異なることに注目する必要がある。

以上から、過去および現在の親の教育方針に関しては、女子学生の方が親とのかかわりが深いことがわかった。特に中学生の頃までの経験として、親が勉強を見てくれる、家族で旅行や美術館等に行く文化的活動において、女性のほうが「経験した」と回答する者が多い傾向がみられた。しかしながら、親とのかかわりの深さゆえか、親の機嫌で叱られるといったことに関しても、女性のほうが「経験した」と回答する者が多かった。

また、現在の進路選択に対する親の態度・行動に関しては、男女ともに、親は自身の価値観を押し付けず、費用面・心理面で子どもの希望進路の実現を応援してくれていると感じる者が多い

表7 男女別、自身の進路選択に対する親の態度・行動

項目	性別	全くあてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	よくあてはまる	(%) 合計 (下段はN)	χ^2
(A) 親の希望や意見を強く言う	男性	33.3	42.8	18.0	5.9	100.0 (222)	n.s.
	女性	32.2	42.0	20.5	5.4	100.0 (205)	
(B) 進路の相談にのってくれる	男性	13.1	20.3	47.7	18.9	100.0 (222)	†
	女性	8.3	20.5	42.0	29.3	100.0 (205)	
(C) 希望の進路を前向きに応援してくれる	男性	8.6	10.4	43.2	37.8	100.0 (205)	†
	女性	3.9	10.7	37.6	47.8	100.0 (205)	
(D) 進路選択にかんする親の経験談を話してくれる	男性	20.5	23.6	39.1	16.8	100.0 (220)	†
	女性	21.0	31.2	28.3	19.5	100.0 (205)	
(E) 就職活動に必要な費用を出してくれる	男性	14.5	14.1	42.3	29.1	100.0 (220)	**
	女性	11.7	17.6	28.3	42.4	100.0 (205)	
(F) あまり関心がなさそうである	男性	44.8	39.8	12.7	2.7	100.0 (221)	n.s.
	女性	50.7	32.7	11.2	5.4	100.0 (205)	

※網掛けの部分は、それぞれの性別で最も回答者の多かった回答。

** p < .01 † p < .1

ことがわかった。しかしながら、親が自身の進路選択の経験談を話してくれるという項目に関しては、男女で異なっており、女子学生の場合「あてはまらない」を選ぶ者が多い。以上から、現在の進路選択に関しては、女子学生は親から自主性を尊重され手厚い支援を得ながらも、親の経験談を聞くといった実際的な活動に役立つ情報を親からあまり得られていないと言えよう。

3-3. 能力観×家庭背景

以下では、能力観と各種の家庭背景を示す指標を掛け合わせて、その傾向を考察する。なお、各指標とも、10%未満の有意差が認められた設問のみ、その数値等を示す。また、クロス表における分析で、有意差が明確に出るように、5件法で問うた能力観の選択肢を一部統合し3件法とした。具体的には、「劣っていると思う」「やや劣っていると思う」を合算したものを「劣位評価」と記し、「やや秀でていると思う」と「秀でていると思う」を合計したものを「優位評価」と記した。中間にあたる「同位評価」では「同程度だと思う」の割合をそのまま転記した。

3-3-1. 大学生の能力観と父母の最終学歴

先の基礎集計で、父母の最終学歴として男女ともに大卒者の割合が高かったため、分析にあたっては「大卒以上」と「大卒未満」に分けた。また、「その他」および「わからない」は分析から外している。

父母の最終学歴と学生の自身の能力に対する自己評価をクロス集計した。大卒以上、大卒未満で有意差が出たものを表8に示している。表に示すように、男子学生の場合、父親学歴で7項目、母親学歴で5項目、有意差が出た。また、女子学生の場合、父親学歴で2項目、母親学歴で6項目、有意差が出た。以上から、子どもの抱く自身の能力への自己評価（能力観）と父母の最終学歴に関しては、同性同士（同性の親と子）の関係性が強い様子が窺われる。

また、男子学生、女子学生ともに、父親学歴が関係しているのは「(H) 論理的な文章を書く力」であり、男子学生、女子学生ともに父親が大卒以上の方が、自己評価が高い。また、同じく、男子学生、女子学生ともに母親学歴が関係しているのは「(B) 集団の中でリーダーシップをとる力」「(L) 独創的なアイデアを生み出す力」である。ただ、前者 (B) は、男子学生、女子学生ともに母親が大卒以上の方が自己評価は高いが、後者 (L) に関しては、女子学生の場合、母親学歴が大卒未満の方が、自己評価が高い。

3-3-2. 大学生の能力観と父母の職業

父母の職業に関しては、選択肢が多様であるため、カテゴリーをいくつか集約したのち、一元配置の分散分析を用いて、能力観の平均値を調べた。

結果を示す前に、父母の職業に対してカテゴリーの集約法を述べておく。父母それぞれの職業ともに「その他」はどのカテゴリーに分類したらよいか不明であるため、除外した。父母ともに「専門・技術・教職」「管理職」を「専門・管理職」とし「事務・営業・販売職」「製造・建設・運転・労務職」「サービス職」「農林漁業職」を「専門・管理職以外の職業」とした。残る「専業主夫・主婦」「無職」を、父親の場合は「専業主夫等」と表記し、母親の場合は「専業主婦等」

表8 男女別、自身の能力観 × 父母の最終学歴

男子学生

<父親の学歴>

項 目	学歴区分	劣位評価	同位評価	優位評価	合計 (下段はN)	χ^2
(E) 社会的弱者のおかれた状況を想像する力	大卒未満	13.2	44.0	42.9	100.0 (91)	†
	大卒以上	10.7	30.4	58.9	100.0 (112)	
(H) 論理的な文章を書く力	大卒未満	45.1	35.2	19.8	100.0 (91)	†
	大卒以上	30.6	36.9	32.4	100.0 (111)	
(I) 批判的に文章を読む力	大卒未満	34.1	39.6	26.4	100.0 (91)	*
	大卒以上	25.0	30.4	44.6	100.0 (112)	
(K) 自分が考えていることを表現する力	大卒未満	17.6	46.2	36.3	100.0 (91)	†
	大卒以上	25.9	30.4	44.6	100.0 (112)	
(M) 新しいことにチャレンジする積極性	大卒未満	16.5	41.8	41.8	100.0 (91)	*
	大卒以上	19.6	24.1	56.2	100.0 (112)	
(N) 物事に継続して取り組む力	大卒未満	12.2	43.3	44.4	100.0 (90)	*
	大卒以上	20.5	25.9	53.6	100.0 (112)	
(O) 他者（先輩、上司、顧客など）から理不尽な要求をされても冷静に対処する力	大卒未満	16.5	46.2	37.4	100.0 (91)	†
	大卒以上	18.8	31.2	50.0	100.0 (112)	

<母親の学歴>

項 目	学歴区分	劣位評価	同位評価	優位評価	合計 (下段はN)	χ^2
(B) 集団の中でリーダーシップをとる力	大卒未満	28.9	33.8	37.3	100.0 (142)	†
	大卒以上	25.0	21.7	53.3	100.0 (60)	
(J) 自ら問いをたて、答えを導きだす力	大卒未満	24.1	43.3	32.6	100.0 (141)	†
	大卒以上	13.3	38.3	48.3	100.0 (60)	
(K) 自分が考えていることを表現する力	大卒未満	23.1	42.7	34.3	100.0 (143)	*
	大卒以上	21.7	25.0	53.3	100.0 (60)	
(L) 独創的なアイデアを生み出す力	大卒未満	26.6	42.7	30.8	100.0 (143)	***
	大卒以上	18.3	21.7	60.0	100.0 (60)	
(M) 新しいことにチャレンジする積極性	大卒未満	18.9	36.4	44.8	100.0 (143)	†
	大卒以上	18.3	21.7	60.0	100.0 (60)	

*** p < .001 * p < .05 † p < .1

女子学生

<父親の学歴>

項 目	学歴区分	劣位評価	同位評価	優位評価	合計 (下段はN)	χ^2
(G) 情報を収集し活用する力	大卒未満	14.1	42.3	43.6	100.0 (78)	†
	大卒以上	25.9	30.6	43.5	100.0 (108)	
(H) 論理的な文章を書く力	大卒未満	34.6	44.9	20.5	100.0 (78)	*
	大卒以上	38.9	27.8	33.3	100.0 (108)	

<母親の学歴>

項 目	学歴区分	劣位評価	同位評価	優位評価	合計 (下段はN)	χ^2
(B) 集団の中でリーダーシップをとる力	大卒未満	30.9	38.2	30.9	100	*
	大卒以上	37.5	19.6	42.9	100	
(E) 社会的弱者のおかれた状況を想像する力	大卒未満	6.6	36.0	57.4	100.0 (136)	**
	大卒以上	21.4	35.7	42.9	100.0 (56)	
(G) 情報を収集し活用する力	大卒未満	13.2	39.7	47.1	100.0 (136)	**
	大卒以上	35.7	26.8	37.5	100.0 (56)	
(L) 独創的なアイデアを生み出す力	大卒未満	29.4	36.8	33.8	100.0 (136)	†
	大卒以上	46.4	30.4	23.2	100.0 (56)	
(N) 物事に継続して取り組む力	大卒未満	9.6	31.6	58.8	100.0 (136)	***
	大卒以上	30.4	28.6	41.1	100.0 (56)	
(O) 他者(先輩、上司、顧客など)から理不尽な要求をされても冷静に対処する力	大卒未満	18.4	32.4	49.3	100.0 (136)	*
	大卒以上	21.4	48.2	30.4	100.0 (56)	

*** p < .001 ** p < .01 * p < .05 † p < .1

と表記した。なお、女子学生の父親で「専業主夫等」に従事している者はいなかった。

表9は一元配置の分散分析を行った結果である。男子学生の父親に関しては、「(P) 体力」について、専門・管理職以外の職業に就く父親を持つ男子学生の方が平均値は高く自己評価が高い。他方、女子学生の父親に関しては「(G) 情報を収集し活用する力」「(L) 独創的なアイデアを生み出す力」について、専門・管理職以外の職業に就く父親を持つ女子学生の方が自己評価が高い。

男子学生の母親に関しては、「(F) 自分で予定をたててやり遂げる力」のみ専業主婦等をしていいる母親を持つ男子学生の方が自己評価が高い。その他の項目、具体的には「(B) 集団の中でリーダーシップをとる力」「(C) 周りの人を楽しませる力」「(D) 場の空気を読む力」「(G) 情報を収集し活用する力」「(L) 独創的なアイデアを生み出す力」については、専門・管理職に就く母親を持つ男子学生の方が自己評価が高い。他方、女子学生の母親に関しては、「(G) 情報を

表9 男女別、自身の能力観 × 父母の職業

男子学生

<父親>

項目	職業区分	平均値	標準偏差	F値	χ^2
(P) 体力	専門・管理職 (N=87)	3.28	1.21	3.809	*
	専門・管理職以外の職業 (N=103)	3.70	1.15		
	専業主夫等 (N=4)	2.95	1.71		

<母親>

項目	職業区分	平均値	標準偏差	F値	χ^2
(B) 集団の中でリーダーシップをとる力	専門・管理職 (N=41)	3.51	1.16	3.468	*
	専門・管理職以外の職業 (N=65)	2.95	0.99		
	専業主婦等 (N=82)	3.13	1.07		
(C) 周りの人を楽しませる力	専門・管理職 (N=41)	3.66	1.13	4.199	*
	専門・管理職以外の職業 (N=65)	3.15	1.05		
	専業主婦等 (N=83)	3.08	1.06		
(D) 場の空気を読む力	専門・管理職 (N=41)	3.80	0.93	3.652	*
	専門・管理職以外の職業 (N=65)	3.65	0.91		
	専業主婦等 (N=83)	3.35	0.99		
(F) 自分で予定をたててやり遂げる力	専門・管理職 (N=41)	3.17	1.18	2.522	†
	専門・管理職以外の職業 (N=65)	2.83	1.02		
	専業主婦等 (N=82)	3.21	1.03		
(G) 情報を収集し活用する力	専門・管理職 (N=40)	3.63	0.90	4.903	**
	専門・管理職以外の職業 (N=65)	3.06	0.97		
	専業主婦等 (N=83)	3.39	0.91		
(L) 独創的なアイデアを生み出す力	専門・管理職 (N=41)	3.73	0.90	7.801	***
	専門・管理職以外の職業 (N=65)	3.11	0.89		
	専業主婦等 (N=83)	3.06	0.99		

*** p < .001 ** p < .01 * p < .05 † p < .1

女子学生

<父親>

項目	職業区分	平均値	標準偏差	F値	χ^2
(G) 情報を収集し活用する力	専門・管理職 (=88)	3.18	1.078	3.648	†
	専門・管理職以外の職業 (N=93)	3.47	.973		
	専業主夫等 (N=0)	—	—		
(L) 独創的なアイデアを生み出す力	専門・管理職 (=88)	2.80	1.126	3.799	†
	専門・管理職以外の職業 (N=93)	3.12	1.102		
	専業主夫等 (N=0)	—	—		

<母親>

項目	職業区分	平均値	標準偏差	F値	χ^2
(G) 情報を収集し活用する力	専門・管理職 (N=53)	3.09	1.024	2.759	**
	専門・管理職以外の職業 (N=81)	3.31	1.091		
	専業主婦等 (N=55)	3.56	.977		

** p < .01 † p < .1

収集し活用する力」について、専業主婦等をしている母親を持つ女子学生の方が自己評価が高い。

3-3-3. 大学生の能力観と親の教育方針

最後に、大学生の能力観と親の教育方針の関係について考察する。筆者の研究関心は幼少期からの継続的な親の働きかけであるため、特に過去の経験（本調査で言えば中学生の頃まで親や家族と行った経験）に焦点を絞って考える。

表10は大学生の能力観の「優位評価」に着目して、男女で有意差のあったものを掲載している。例えば、表中の（注1）を説明すると、女子学生の「(B) 親がよく本を読んでもくれた」と「(A) 年上・目上の人のコミュニケーション能力」が交差するセルにおける「否定 > 肯定」という等号は、「本をあまり読んでくれなかった」および「全く読んでくれなかった」という否定的回答を選択した者のほうが、優位評価を行った者（つまり、「周囲と比べてやや秀でていると思う」および「秀でていると思う」を選んだ者）の割合が高いことを意味する。また、逆の統合である「否定 < 肯定」の意味を説明すると、例えば、男子学生の「(B) 親がよく本を読んでもくれた」と「(C) 周りを楽しませる力」が交差するセル（注2）の解釈は、「本をたまに読んでくれた」および「よく読んでくれた」という肯定的回答を選択した者のほうが、優位評価を行った者の割合が高いことを意味する。表を一覧すると、総じて、肯定的な回答の方が優位評価の割合が高いと言える。また、中学生までの経験に関して、男女によって、能力観に有意差が出やすい経験と出にくい経験の違いがあることがわかる。男子学生の場合は、「(B) 親がよく本を読んでもくれた」や「(D) 家族で美術館・博物館・図書館に行った」で、能力観の有意差が出やすい（つまり「(B) 親がよく本を読んでもくれた」「(D) 家族で美術館・博物館・図書館に行った」ともに、7項目の能力観に関して、否定的見解、肯定的見解の間で有意差が出ている）。他方、女子学生の場合は「(E) 欲しいものを何でも買ってくれた」という項目で、能力観の有意差が出やすく、5つの能力観において、否定的見解、肯定的見解の間で有意差が出ている。

(表10の続き)

	性別	(I) 批判的に文章を読む力		(F) 自ら問いを立て答えを導きだす力		(K) 自分の考えを表現する力		(L) 独創的なアイデアを生み出す力		(M) 新しいことに挑戦する積極性		(N) 物事に継続して取り組む力		(O) 他者から求められないで静に待てる力		(P) 体力	
		優位評価における割合の大きさ	χ^2	優位評価における割合の大きさ	χ^2	優位評価における割合の大きさ	χ^2	優位評価における割合の大きさ	χ^2	優位評価における割合の大きさ	χ^2	優位評価における割合の大きさ	χ^2	優位評価における割合の大きさ	χ^2	優位評価における割合の大きさ	χ^2
(A) 親が勉強をみてくれた	男子学生			否定 < 肯定	†	否定 < 肯定	†					否定 < 肯定	†				
	女子学生																
(B) 親がよく本を読んでくれた (雑誌・マンガ除く)	男子学生	否定 < 肯定	**	否定 < 肯定	**	否定 < 肯定	*	否定 < 肯定	†								
	女子学生																
(C) 家族で旅行に行った	男子学生																
	女子学生																
(D) 家族で美術館・博物館・図書館に行った	男子学生	否定 < 肯定	**	否定 < 肯定	**	否定 < 肯定		否定 < 肯定	†					否定 < 肯定	*	否定 < 肯定	*
	女子学生	否定 < 肯定	†														
(E) 欲しいものを何でも買ってくれた	男子学生																
	女子学生			否定 < 肯定	†	否定 < 肯定	***	否定 < 肯定	*	否定 < 肯定	*						
(F) 一人あるいは兄弟のみで食事をした	男子学生					否定 < 肯定	†	否定 < 肯定	**	否定 < 肯定	*						
	女子学生							否定 < 肯定	†	否定 < 肯定	*						
(G) 親の機嫌で叱られた	男子学生																
	女子学生																
(H) 親に叩かれた	男子学生																
	女子学生																

*** p < .001 ** p < .01 * p < .05 † p < .1

(注1) この表記の意味は、本を読んでもらわなかった女子学生のほうが、読んでもらった女子学生よりも「(A) 年上・目上の人とのコミュニケーション力」が「秀でていると思う」「やや秀でていると思う」と回答した者の割合が高いことを意味する。
このように、中学生の頃までの親との経験に関して否定回答（あまりなかった、まったくなかった）の選択者の方が、肯定回答（たまたまにあった、よくあった）の選択者よりも優位評価を下している者が多い場合は、「否定」と表記し、「肯定」と表記し、網掛けを施した。
(注2) この表記の意味は、本を読んでもらった男子学生のほうが、読んでもらわなかった男子学生よりも「(E) 社会的弱者の状況に対する想像力」が「秀でていると思う」「やや秀でていると思う」と回答した者の割合が高いことを意味する。
このように、中学生の頃までの親との経験に関して肯定回答（たまたまにあった、よくあった）の選択者の方が、否定回答（あまりなかった、まったくなかった）の選択者よりも優位評価を下している者が多い場合は、「肯定」と表記し、「否定」と表記した。

4. おわりに

本論文では、大学生の能力観の多様化を示す指標として「知識」「他者」「自己」に関わる能力に着目して、それらの能力と家庭背景との関係性の解明に努めた。その結果、学生の能力の自己評価と同性の親学歴に何らかの関係性があることが推察されること、男女ともに「論理的な文章を書く力」に関して、父親学歴が高いほうが高く自己評価をしていること、親の職業との関連では「情報を収集し活用する力」において、男子学生の場合は専門・管理職に就く母親を持つ男子学生の方が自己評価が高いものの、女子学生の場合は専業主婦等をしている母親を持つ女子学生の方が自己評価が高いこと等がわかった。

冒頭に触れた、多様な能力観の提言は、社会の人材配置の原理の転換を示唆しているように思われる。従来、職業等、社会の人材配置においては、学校教育を媒介とした配分（いわゆる縦の学歴や横の学歴といった業績に基づく配分）が行われてきた。これは、学校教育が制度上開かれた平等なものであるという前提から（たとえ実態がそうした前提と合致していなくても）、社会的に是認されてきた理念である。例えば、本田（2005）が予見するように、仮に学校から職業への移行において評価される観点が、努力で獲得できるものから、より属性的なもの、あるいは努力では獲得しづらい、環境によって獲得されるものへと変化しているとすれば、この変化の様相を描きだすことが必要である。つまり、若者の能力育成における家庭教育の影響の強さを描くことによって初めて、学校教育など家庭教育の代替となる機関で、能力を伸ばすためにいかなる補完が可能かを考える上での示唆が得られると思われる。

本論文で用いた分析手法はクロス集計を中心としたプリミティブな方法である。方法的な見地以外にも、枠組みや仮説の弱さから、正直、本論文では、能力観と家庭背景の関係性を十分解明できたとは言えない。以上の問題意識を解明すべく、今後、基礎的手法を用いてデータの傾向をおさえつつも、学生の能力観がいかに規定されるのか、また家庭背景の影響力はどれくらい大きいのかといった点に関して、多変量解析の手法を用い解明していきたい。

【謝辞】

本論文は早稲田大学教育総合研究所B-10研究部会で研究資金を助成していただいた調査に基づいている。協力して下さった関係各所の皆様に熱くお礼を申し上げたい。

引用参考文献

- 大学生の就職意識研究会（研究代表吉田文、早稲田大学教育総合研究所B-10部会）、2011、『大学生の進路意識に関する調査報告書』。
- 本田由紀、2005、『多元化する能力と日本社会－ハイパー・メリトクラシー化のなかで』NTT出版。
- 荻谷剛彦・平沢和司・本田由紀・中村高康・小山治、2006、「大学から職業へⅢその1：就職機会決定のメカニズム」『東京大学大学院教育学研究科紀要』46巻、pp.43-74。
- 荻谷剛彦・本田由紀編、2010、『大卒就職の社会学－データからみる変化』東京大学出版会。
- 小杉礼子編、2007、『大学生の就職とキャリアー「普通」の就活・個別の支援』勁草書房。
- 日本生産性本部経済開発部、2009、「新入社員意識調査」。

1) 以下の表は、2000年代以降、政策面で提言された能力観とその構成要素の内訳を河野が整理したものである。出典：河野志穂、関東教育学会第57回大会（2009年11月1日、国士舘大学）、発表資料。

各能力観	具体的な構成要因の内容		出典	
4領域・8能力	人間関係形成能力 (他者の個性を尊重し、自己の個性を發揮しながら、様々な人々とコミュニケーションを図り、協力・協同してものごとに取り組む)	自他の理解能力	自己理解を深め、他者の多様な個性を理解し、互いに認め合うことを大切に行動していく能力	出典：国立教育政策研究所生徒指導研究センター、「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について（調査研究報告書）」、2002年。
		コミュニケーション能力	多様な集団・組織の中で、コミュニケーションや豊かな人間関係を築きながら、自己の成長を果たしていく能力	
	情報活用能力 (学ぶこと・働くことの意義や役割及びその多様性を理解し、幅広く情報を活用して、自己の進路や生き方の選択に活かす)	情報収集・探索能力	進路や職業等に関する様々な情報を収集・探索するとともに、必要な情報を選択・活用し、自己の生き方を考えていく能力	
		職業理解能力	様々な体験等を通して、学校で学ぶことと社会・職業生活との関連や、今しなければならぬことを理解していく能力	
	将来設計能力 (夢や希望を持って将来の生き方や生活を考え、社会の現実を踏まえながら、前向きに自己の将来を設計する)	役割把握・認識能力	生活・仕事上の多様な役割や意義及びその関連等を理解し、自己の果たすべき役割等についての認識を深めていく能力	
		計画実行能力	目標とすべき将来の生き方や進路を考え、それを実現するための進路計画を立て、実際の選択行動等で実行していく能力	
	意思決定能力 (自らの意思と責任でよりよい選択・決定を行うとともに、その過程での課題や葛藤に積極的に取り組み克服する)	選択能力	様々な選択肢について比較検討したり、葛藤を克服したりして、主体的に判断し、自らにふさわしい選択・決定を行っていく能力	
		課題解決能力	意思決定に伴う責任を受け入れ、選択結果に適応するとともに、希望する進路の実現に向け、自ら課題を設定してその解決に取り組む能力	
人間力	知的能力的要素	基礎学力 (主に学校教育を通じて修得される基礎的な知的能力)	出典：人間力戦略研究会、「人間力戦略研究会報告書 若者に夢と目標を抱かせ、意欲を高める一信頼と連携の社会システム」、2003年。	
		専門的な知識・ノウハウ		
		論理的思考力		
		創造力		
	社会・対人関係的要素	コミュニケーションスキル		
		リーダーシップ		
		公共心 規範意識 他者を尊重し切磋琢磨しながらお互いを高め合う力		
	自己制御的要素	意欲		
		忍耐力		
		自分らしい生き方や成功を追求する力		
若年者就職基礎能力	コミュニケーション能力	意思疎通	自己主張と傾聴のバランスをとりながら、効果的に意思疎通ができる	出典：厚生労働省、「若年者就職基礎能力の修得の目安」 (http://www.mhlw.go.jp/general/seido/syokunou/yes/01.html 、閲覧日 2009年10月28日)
		協調性	双方の主張の調整を図り、調和を保つことができる	
		自己表現能力	状況に合った訴求力のあるプレゼンテーションを行うことができる	
	職業人意識	責任感	社会の一員として役割の自覚を持っている	
		向上心・探究心	働くことへの関心や意欲を持ちながら、進んで課題を見つけ、レベルアップを目指すことができる	
		職業意識・勤労観	職業や勤労に対する広範な見方・考え方をもち、意欲や態度等で示すことができる	
	基礎学力	読み書き	職務遂行に必要な文書知識を持っている	
		計算・計数・数学的思考力	事務・営業職の職務を遂行するに当たり必要な数学的な思考方法や知識を持っている	
		社会人常識	社会人として必要な常識を持っている	
	ビジネスマナー	集団社会に必要な気持ちの良い受け答えやマナーの良い対応ができる		
	資格取得	(情報技術関係) 社会人として必要なコンピュータの基本機能の操作や情報処理・活用ができる		
		(経理・財務関係) 社会人として必要な経理・会計、財務に関する知識を持ち活用ができる		
(語学力関係) 社会人として必要な英語に関する知識を持ち活動ができる				

各能力	具体的な構成要因の内容		出典	
社会人基礎力	前に踏み出す力 (アクション)	主体性	物事に進んで取り組む力 例) 指示を待つのではなく、自らやるべきことを見つけて積極的に取り組む	
		働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力 例) 「やろうじゃないか」と呼びかけ、目的に向かって周囲の人々を動かしていく	
		実行力	目的を設定し確実に行動する力 例) 言われたことをやるだけでなく自ら目標を設定し、失敗を恐れず行動に移し、粘り強く取り組む。	
	考え抜く力 (シンキング)	課題発見力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力 例) 目標に向かって、自ら「ここに問題があり、解決が必要だ」と提案する	
		計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力 例) 課題の解決に向けた複数のプロセスを明確にし、「その中で最善のものは何か」を検討し、それに向けた準備をする	
		創造力	新しい価値を生み出す力 例) 既存の発想にとらわれず、課題に対して新しい解決方法を考える	
	チームで働く力 (チームワーク)	発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力 例) 自分の意見をわかりやすく整理した上で、相手に理解してもらいようように的確に伝える	
		傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力 例) 相手の話しやすい環境をつくり、適切なタイミングで質問するなど相手の意見を引き出す	
		柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力 例) 自分のルールややり方に固執するのではなく、相手の意見や立場を尊重し理解する	
		状況把握力	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力 例) チームで仕事をするとき、自分がどのような役割を果たすべきかを理解する	
		規律性	社会のルールや人との約束を守る力 例) 状況に応じて、社会のルールに則って自らの発言や行動を適切に律する	
		ストレスコントロール力	ストレスの発生源に対応する力 例) ストレスを感じるがあっても、成長の機会だとポジティブに捉えて肩の力を抜いて対応する	
	学士力	知識 (専攻する特定の学問分野における基本的な知識を体系的に理解するとともに、その知識体系の意味と自己の存在を歴史・社会・自然と関連付けて理解する)	他文化・異文化に関する知識の理解	
			人類の文化、社会と自然に関する知識の理解	
		汎用的技能 (知的活動でも職業生活や社会生活でも必要な技能)	コミュニケーション・スキル	日本語と特定の外国語を用いて、読み、書き、聞き、話すことができる
数量的スキル			自然や社会的現象について、シンボルを活用して分析し、理解し、表現することができる	
情報リテラシー			情報通信技術 (ICT) を用いて、多様な情報を収集・分析して適正に判断し、モラルに則って効果的に活用することができる	
論理的思考力			情報や知識を複眼的、論理的に分析し、表現できる	
問題解決力			問題を発見し、解決に必要な情報を収集・分析・整理し、その問題を確実に解決できる	
態度・志向性		自己管理能力	自らを律して行動できる	
		チームワーク、リーダーシップ	他者と協調・協働して行動できる。また、他者に方向性を示し、目標の実現のために動員できる	
		倫理観	自己の良心と社会の規範やルールに従って行動できる	
	市民としての社会的責任	社会の一員としての意識を持ち、義務と権利を適正に行使しつつ、社会の発展のために積極的に関与できる		
	生涯学習力	卒業後も自律・自立して学習できる		
統合的な学習経験と創造的思考力	これまでに獲得した知識・技能・態度等を総合的に活用し、自らが立てた新たな課題にそれらを適用し、その課題を解決する能力			
			出典：社会人基礎力に関する研究会『「中間取りまとめ」報告書」、2006年。 出典：中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」2008年。	

2) 本田 (2005 : 22) が「近代型能力」「ポスト近代型能力」の特徴を描いた表を抜粋する。

「近代型能力」	「ポスト近代型能力」
「基礎学力」 標準性 知識量、知的操作の速度 共通尺度での比較可能 順応性 協調性、同質性	「生きる力」 多様性・新規性 意欲・創造性 個別性・個性 能動性 ネットワーク形成力、交渉力

なお、近代型能力とは、フォード主義的な大量生産を中心とする産業社会で求められる能力であり、ポスト近代型能力とは、情報化・消費化を特徴とするポスト産業社会で求められる能力を指す。

